

# 祭りばやし

登場人物

ナレーター

ゆき

祖父

祖母

父、しんじ

母、りつ

下働きのきよ

よきち

とういち

さんじ

へいた

村の若い衆

近所の子 A

B

ナレーター

これは能登の海辺のある村のお話です。村の網元の家には目の見えないゆきという娘がいました。

その日はちようど村のお祭りの日でした。

## 第一場

遠くで子どもたちの笑い声

近所の子 A  
近所の子 B

ヤーイ、めくら、めくら。  
気つ持ちわりいな、あつち行けま。  
こりや、このくそがきども、またうちの子いじめとる。

父

近所の子の笑いながら逃げて行く声。  
幕が上がると、網元の家の土間と土間に  
続く居間の奥に寝間がある。  
下手より、父親がゆきの手を引いて現れる。

きよ

ほんとに、こまったがきどもや。きよ、きよ。  
玄関から水くみの桶を下げて下働きのきよが入ってくる。

きよ

はい、だんなさま。お早うございます。  
きよ、この子、着替えさせてくれ。また近所の子らに砂かけられとった。

父

はい。(身体の砂を払い落としながら) また、  
こんなかけられて・・・。

きよ

きよももつと気つけて見とつてくれんと、危な  
くてしょうがないわ。

祖母

はい。さあさあ、もう泣かんと。  
祖母が寝間から出てくる。

きよ

朝はよから何ごとや。  
ばあちゃん、起こしてしもたけ。

おはようございます。

祖母

ああら、またいじめられたんか、きよさん、ちやんと見とらんとだめやがいね。

きよ

はい、申し訳ありません。

祖母

りつさん、りつさん、いつまで寝とるがいね。

ほんとに目見えん子は生むは、朝は起きるのが遅いわ、よわった嫁や。

父

ばあちゃん、やめまっしま。

祖父が寝間から出てくる。

祖父

何や、朝からうるさいな。今日はゆきの大切な日やぞ、何をもめとるんや。

父

ゆきの大切な日やて、いったい何のことや、じいちゃん。

祖父

ああ、後で話するわ。

母

(あわてて、寝間から出てきて) お早うございます。遅くなつてすみません。

祖母

ほんとに、えらいご身分やわ。今ごろ起きてきて・・・きよさん、はよう、朝めしのしたくせんかいね。

暗転

第二場

居間で一家が食事をしている。ゆきが食事を散らかしながら食べている。

祖母

りつさん、もつとちやんと食べさせんかいね。ああきたない。もう食べる気せんわ。じいちゃん、あっち行こう。

祖母と祖父が出ていく。

父

りつ、すまんなあ。

母

しかたないわいね。私の生んだ子やし。そやけど、ゆきがかわいそうで。いつそのこと、この家出てしまいたいわ。

父

そんなこといわんと、はよめし食べよ。今日は祭りで忙しなるでさかい。

食事が終わったころ、よきちが客を連れて入ってくる。

よきち

こんにちは。だれがおらんかいね。

父

やあ、よきちさんやないか、久しぶりやな。たっしやかいな。

よきち

おう、おかげさんで。しんじさんとこもみんなたっしやかいね。

父

ああ、遠いところ、よく来てくださつた。さあさ、今日は祭りや。あがつてくれや。

よきち

おう、ちよつと待つてくれや。今日はお客さん連れて来とるんや。じいちゃん呼んでくれるか。じいちゃん、よきちさんが来たぞう。

祖父、祖母が奥から出てくる。

祖父

おう、よきち、久しぶりやな。まあ、あがつて

くれや。ところで、たのんどつた人、連れて来てくれたか。

よきち

ああ、じいちゃんから便りもろて、遠いところ無理して来てもろたわ。とういちさん、こつち入って来てくだつし。

とういち

おじやまします。

祖父

やあ、遠いところごくろうさんやつたね。ほんならこつちに座つてもろうか。きよ、きよ、お客さんにお茶出してくれんか。

きよ

はい。(奥で声だけ)

よきち、とういち、家族が居間に座る。

きよがお茶を置いて去る。

父

ところで、お客さんはどこからいらしたげ。

よきち

なんや、じいちゃん、まだ話してなかつたがけ。

こちらの人は加賀の山代の温泉場であんまの親方をしておられるとういちさんや。

父

そんで、こんな遠い能登まで、また何で来ましたんげ。

祖父

あのなあ、しんじ、わしがたのんで来てもろたんや。ゆきの将来のことを考えたら、いつまでもうちに閉じ込めておくわけにもいかんやろう。それで、あんまでもさせようと思つて話を

しに来てもろたんや。

母

じいちゃん、そやけど、ゆきはまだ小さいし、

とういち

先のこと決めるの早いがでないけ。

奥さん、そんなことないわいね。このくらの時からわしらのとこへ来て修業すりや、ちゃあんと一人前になるわいね。

祖母

こんな孫でも、自分の孫や。かわいそうやと思うけどしかたない。すぐにでかなるし、いつまでもおいとけんしね。

母

そやけど、ゆきはまだ子どもやし、もう少し親と一緒におらんとかわいそうやわ。ついこの間おっぱいはなれたばかりやがいね。

とういち

奥さんの心配はようわかるけど、うちへ来る子はみんなこれくらい年からやわ。私が親代わりになつて一生めんどうみますさかい。

父

じいちゃん、わしら夫婦に何の相談もなしに急にこんなこと言われてもこまるわ。

よきち

そんなこと言わんと。じいちゃんもばあちゃんもよう考えたうえでのことやし、わしら親戚のものも、いつまでも目見えん子がこの家におけるつちゆうのも世間にきがねでな。

父

なんやて、お前んとこのつごうでうちの子の将来決めるんか。

祖父

しんじ、やめんか。お客さんの前でみつともない。とういちさん、すみません。息子夫婦には今夜よう言い聞かせますさかい。今日は祭り見

第三場

祖母

物でもしてゆつくりしていつてくだつし。明日には孫を連れていつてもらえるようにしますさかい。

遠いところ、お疲れになつてでしょう、さあ、あつちで休んでくだつし。

祖父、祖母、よきち、とういちが奥へ消える。

父、母は黙つてゆきの頭をなでる。暗転。

ナレーター

昼ごろになり、土間ではきよが祭りのごちそうの準備をしています。そこへ村の若い衆のさんじとへいたがやつて来ました。

きよが忙しそうに土間を行き来する。居間ではゆきが遊んでいる。

遠くから祭りばやしが聞こえてくる。

さんじ

こんにちは。祭りのおみきもらいに来たわ。

きよ

あら、さんじさんにへいたさん、ごくろさん。今年の祭りどうやいね。

へいた

網元のだんなさんが顔出してくれんから、いまいちや。

だんなさん、どうなさつたんや。

きよ

(奥からおみきを持ってきながら)それがね、

さんじ

遠いところからお客さんが来とられてね。

へええ、祭りにも顔だせんほどの大事な客か。いつたれどこのどなたや。

きよ

なんでも、加賀の山代であんまの親方しとる人やて。

なんでもまた。

きよ

(声を落として)実は、この子、目見えんゆうことで、加賀のほうへあんまの修業に出されるらしいげ。

三人、しばらくゆきを見つめる。

かわいそうな話やな。

まだ、こんなちつちやいにな。

さんじ

もう、この村の祭りばやしも聞けんがになるんやな。

きよ

だんなさまも若奥さまもずいぶんと悩んどられるわ。

へいた

ほうやろなあ。

(さんじにおみきを渡しながら)これ、ごくろうさまです。

さんじ

おおきに。確かに受け取つたわ。きよさん、また夜になったら獅子舞いに来るわ。この子、寝

かさんと起こしといてや。

きよ

ありがと。ほんならそうするわ。二人ともあんまり飲み過ぎんようにね。

へいた　酒を持って玄関から走り去りながら、  
わかつとる。わかつとる。

第四場

ナレーター　夜になりました。綱元の家では、たくさんのお客がにぎやかに祭りのごちそうを食べています。

奥の間から大勢の話し声、笑い声が聞こえる。居間にはゆきが遊んでいる。土間できよが腰を下ろしてゆきを見ている。祭りばやしがだんだん大きくなる。

父　奥の間から父が出てきて、  
おおつ、獅子舞いが来たぞ。

奥の間から、母、祖父、祖母、よきち、とういちが出てくる。きよが立ち上がって玄関の戸を開けると、棒ふりのさんじを先頭に獅子舞いの若い衆、近所の子A、Bらが土間に入って来て獅子舞いを始める。

そのうちによつぱらったさんじが居間に転がるようにして上がり込む。

祖父　こら、さんじ、酔っぱらいやがつて。ここをどこやと思つとるんや。綱元の家やぞ。

さんじ

なんやて、綱元が聞いてあきれるわ。それがどうした。このくそじじい。

さんじが祖父になぐりかかろうとする。

父

(さんじを押さえながら)さんじ、やめとこ。くそじじいとは何や。さんじ、だれに口きいと

祖父

と思つとるんや。

さんじ

おう、てめえの孫をうちにおけんいうて、あんまに出すのがくそじじいでねえか。

祖父

なんやて。

へいた

そうや、何が綱元や。えらそうに。見てみ、この子、かわいそうに祭りにも出さんと。

さんじ

(ゆきを土間に連れ出しながら)さあ、若い衆、この子も村のもんや。この子を連れて村じゆう獅子舞いに行くぞ。

若い衆ら、ゆきをとりかこみながら土間から出て行こうとする。

へいた

そうや、この子が幸せになりますようにねごうて、獅子舞いするぞ。

さんじを先頭にして、若い衆が舞いながら立ち去る。

父、母、きよが後を追う。

幕が下りる。

# 祭りばやし（中学校向け）

## A 教材設定の意図

本教材は、脚本という形を取っている。

中学生ともなれば、自分を客観的にとらえ、自分と異なる人格を演じる力も育ってきている。自分と異なる人格を演じるためには、その人物の立場に立つてものごとを考えることはもちろんのこと、場面設定やその人物の背景、他の登場人物の考え方や自分との関係等を明確にしながら脚本を掘り下げていく必要がある。ゆきやそのまわりの家族らの役を演じきること、障害を持った人やその家族の思いに触れ、障害者に対する差別や進路の問題を含めて障害者が地域で生きていくということは、どうということかを考えさせたい。

この物語の主人公であるゆきは、自分の思いや将来について一言も語っていない。そのことがかえって、障害を持つ人としてうまくまわりの人々の障害者観を浮かび上がらせる結果となっている。また、障害者自身の思いや願いと別のところ、障害者の生き方が決められていく課程は、時代背景は異なるが、現代にもつながるものである。

それらのことに気づかせることで障害者の置かれている立場を明らかにし、障害者の問題は、障害者自身の問題ではなく、自分をも含めたまわりの人間の問題であるということを考えさせるためにこの教材を設定した。

## B 教材の解説

この教材は、石川県立盲学校の文化祭で上演された「きよの物語」を再構成したものである。大正時代の能登の漁村を背景に、ゆきという目の見えない子をめぐって周りの人たちが彼女の将来をどのように考えていくかを脚本にしている。

近所の子がゆきに対して「ヤーイ、めくら、めくら」という言葉を浴びせかける場面から劇が始まる。視覚障害者が「めくら」という言葉で、どれほど打ちのめされてきたかはかりしれない。視覚障害者本人にはどうしようもない目が見えないという事実を、「めくら」という言葉でもって侮りおとしめる行為は差別以外の何ものでもない。その「めくら」という差別表現を、あえて劇の冒頭にもってきたのは、視覚障害者に対する差別の現実を直視して、差別をなくして欲しいという願いからである。

近所の子の「めくら」という発言は、障害者を劣ったものとして卑しめる社会認識の表れである。ゆきともっとも身近なところで生活している家族もまた、そうした社会に身を置かざるを得ない。ゆきと母親が食事をしている場面で、祖母が「もつと、ちゃんと食べさせんかいね」と言う。「ちゃんと食べさせる」という言葉の背景には、健常者の生活に障害者を近づけることでしか、劣った障害者という烙印を和らげることができないという意識が存在する。そして、祖母はゆきの母親に対して

「いつまで寝とるがいね。ほんとうに目見えん子は生むわ、朝は起きるのが遅いわ、よわった嫁や」と発言する。祖母にとつて、かわいい孫のゆきが社会的に烙印を押されている、そのつらさを、母親にぶつけているのである。祖母の発言は障害者に対する差別の現実がもたらしたものであることを押さえない。

ゆきの将来にかかわって、とういちが「あんまの親方」として登場する。「あんま」の技術は江戸時代に視覚障害者が自らの職業的自立のために確立させ、現在も視覚障害者の生活を支える重要な職業である。江戸時代の視覚障害者は当道座という組織を作り、自らの団結によって「あんま」や金融業を営み富を築いていった。しかし、金融業による生活の安定は、健常者からのねたみを生むことになった。当時の視覚障害者が「あんま」という職業を独占していたことから、彼らを蔑む言葉として「あんま」が使われることにつながっていった。このように、障害者に対する差別や偏見はまわりの人間によって作り出されてきていることを押さえない。

ゆきの将来について、劇中の登場人物は、それぞれの立場と価値観で最も良いと信じる行動や発言を行っている。ゆきが小さいうちに「あんま」の修業のために家から離れることについて、とういちが「このくらいの時からわしらのとこへきて修業すりや、ちやあんと一人前になるわいね」と述べている。親戚のよきちは「わしら親戚のもんも、いつまでも目見えん子がこの家におるつちゆうのも世間にきがねでな」と発言する。一方、さんじやへいたは「さあ、若い衆、この子も村のもんや。ゆきを連れて村じゆう獅子舞いにくぞ」と行動を起こす。そしてゆきの家族の中でも、祖父母や父母はそれぞれに揺れながらゆ

きの将来について意見を交わしている。

こうした劇中の登場人物の発言や行動を、ゆきはどのように聞いたであろうか。ゆきの立場になって考えることで、それぞれが持っている障害者観を問い直すことにつなげていきたい。

### C 指導上の留意点

① 一般的なきらいごとではなく、目の見えない子とその家族やまわりの人たちの思いを、劇の台詞を読み合いながらいねいに読み取らせたい。そのためには、感想文を書く時間も含めて二時間程度の取り組みが必要である。

② 授業後の感想文などで問題を掘り下げたり、文化祭等で同様な劇に取り組めたらさらに深まると考えられる。

### D 参考

・石川の人権教育第3集「出会いを求めて」  
(一九八八年 石川県教組)  
「いっしょに生きること」  
岡崎美紀(石川県立盲学校：当時)

### 本教材を使った授業から

◆ゆきも村の一員に変わらない。ゆきの気持ちも聞くべき。自分が「めくら」だったらどういう気持ちになるだろう。悲しい劇だった。(加賀江沼)

E 授業の展開例

教師の基本発問・助言	生徒の活動・指導の要領
<p>一 導入</p> <p>①教材を配り、教材の説明をする。</p> <p>二 展開</p> <p>②教材を読んでみよう。 ・それぞれの登場人物の役をしてその人物をどう思ったか話し合おう。</p> <p>③父や母、祖父母、よきち、とういち、へいは、ゆきやゆきの将来について、それぞれどう思うか話し合おう。</p> <p>④それぞれの場面でのゆきの気持ちはどうだろうか。</p> <p>三 まとめ</p> <p>⑤話し合ったことをふまえて、この劇の感想をまとめてみよう。</p>	<p>①この教材がどういう経過で出てきたのか。盲学校で実際に上演されたものであることなどを説明する。</p> <p>②場面や登場人物の気持ちを考えながら各自に黙読させる。二回目は、場面ごとに配役を決めて、せりふを読ませる。他の生徒は、ゆきになった気持ちで聞かせる。</p> <p>③文中のどのせりふから読みとれるのか押さえながら登場人物のそれぞれの立場での思いを出させる。</p> <p>④一場面から順番に、ゆきはどういう思いでそれぞれのせりふを聞いていたかを想像させる。</p> <p>⑤時間があつたら、いろいろな感想文を生徒たちにかえすことで、さらに深めていきたい。できれば、自分たちもこの劇を上演してみようというムードを盛り上げていきたい。</p>